

〈越境〉する漱石・近代日本 『坊っちゃん』をめぐって

柴田勝二

1

夏目漱石の辿った軌跡のなかには、様々な〈越境〉が刻みつけられている。そこには幼少期からの家庭環境、職業的な位置、それに伴う生活の場所といった、私的な次元における空間の移動としての〈越境〉に、江戸から明治、大正、あるいは十九世紀から二十世紀という、日本と世界が経ることになる時間的な〈越境〉が折り重ねられ、さらにそのなかで押し進められていった、日本を含む世界の〈強国〉がおこなう空間的拡張としての〈越境〉が、そこに加わってくることになる。

誰もが知るように、漱石夏目金之助は江戸時代の最後の年となった一八六七年、つまり慶応二年に江戸（東京）で生まれたが、明治元年に当たる一八六八年に、夏目家の書生であった塩原昌之助の養子となり、明治九年（一八七六）に夏目家に戻ったものの、昌之助は籍を返さず、明治二年（一八八八）一月に復籍するまで、塩原金之助として生を送っている。しかし自伝的作品である『道草』（大正四）に描かれるように、夏目家に復籍した後も容易に養父塩原昌之助との関係を断ち切ることはできなかった。漱石が『吾輩は猫である』（明治三八〇九）を書いて文名を得た明治三九年（一九〇六）春頃から昌之助は漱石につきまとい始め、明治四二年（一九〇九）には度々金の無心によって漱石を苦しめている。『道草』の末尾にある「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない」というよ

く知られた科白は、直接的には昌之助をモデルとする養父島田の執念深さに対する主人公健三の危惧を語っているが、ここには同時に比喩的な含意が込められている。すなわち断ち切ろうとしても容易に断ち切ることでできない因縁としての養父とは、日本が近代化の流れのなかで捨象することのできない〈前近代〉の残滓の比喩をなし、健三の抱く〈片付かない〉という感慨は、〈前近代〉から〈近代〉へとこの国が〈越境〉することの困難さを示唆するものにほかならないからだ。

この困難さは明治天皇の死による〈明治〉から〈大正〉への移行を契機として、あらためて漱石の実感するものとなっていたかもしれない。『道草』の前年に書かれた『こゝろ』（大正三）の結末に見られるように、漱石が明治という時代の終焉に、日本に訪れるべき転換を想定していたことは疑いない。この作品の「先生」が口にする「明治の精神」の内実についてはここでは限定しないが、いずれにしても先生を自死によって葬ることで、漱石が〈明治〉という時代からの脱却を仮構しようとしたことは否定し難い。先生と交わりを持った若い語り手の「私」は、先生の生きなかつた新しい時代を担うことが期待される存在であり、だからこそ先生は明治という時代とともに自己の生を終えるに至る経緯を綴った長い遺書を彼に託したのである。しかし時間的に十数年遅れてやって来ることだけで、未曾有の新しい世界が享受されうると漱石が考えたのではもちろんない。『こゝろ』

ろ』と『道草』を並列させると、そこには日本の進み行きに対する漱石の苦い認識がこぼれ出ていることが見て取れる。つまり『ころ』において、漱石は先生の自死とともに明治という〈古い時代〉と決着をつけたはずであつたにもかかわらず、次作においては養父に託された〈古い時代〉の残滓が容易に〈片付かない〉という感慨がモチーフをなしているのである。

『道草』から『ころ』を照射すれば、『ころ』で示唆された〈明治〉という時代の終焉は、むしろありうべき可能性として仮構されたヴィジョンであつたことが分かる。そして〈明治〉が〈前時代〉として葬られ、「片付く」までに相当な時間を要するであろうことは、この作品の設定に注意深く盛り込まれている。つまり松澤和宏もその蓋然性を付度する¹ように、『ころ』の「上」を書き始めている「私」の時間的な居場所は、おそらく作品の執筆時である〈大正三年〉ではない。この作品の語り手が、先生と交わりを持っていた頃には独身であつたのが、「上」を書いている時点では「子供」を持つていることについては、小森陽一や秦恒平が「私」と先生の「奥さん」との間に生まれるであろう情交を想定する論考や戯曲を書き²、議論を呼び起こしたが、むしろこの変化は、明治天皇の死去と『ころ』の執筆の間にある以上の時間が、先生の死と「上」の語り出しの間に流れていることを物語っている。『ころ』は明治天皇の死去から三年後に発表され始めているが、「上」の語り手としての「私」の上には、それをかなり上回る時間が流れていると考えられる。それを端的に示唆するものが、この時点で「私」が持っている「子供」の存在なのである。おそらくそれによって暗示される時間の長さに、漱石は明治天皇の病死とそれにつづく乃木希典の殉死、および先生の遂げる自死という三つの〈死〉によつて表象される〈明治〉の終焉を、距離を置いて回顧しうるまでに要

される道程の長さを含めようとしたのであろう。

そう考えれば、『ころ』と『道草』の基底にある漱石の時代への認識に、明確な連繋があることが分かる。江戸——明治——大正という進展のなかで、日本が物質文明と国際関係において大きな変容を経験しながらも、容易に変わりえない層をほらみ、人びとの意識と生活の内実が〈前近代〉から〈近代〉へと真に〈越境〉することがいかに難しいかを漱石は十分に認識していた。逆にいえば、維新以降の日本に訪れた変化と移行が、それだけ激しいものだったということでもある。西洋文明の摂取による急速な近代化の趨勢が、それまで培われた文化的な堆積と齟齬をきたし、様々な混乱と不調和をもたらしたことは、多くの作家、思想家の批判するところとなつた。漱石の批判的言説としては、たとえば講演『現代日本の開化』（明治四四）において近代化の形を「外発的開化」と「内発的開化」の二つに分け、日本の明治期における流れが前者であつたと語られていることはよく知られている。けれどもここで漱石が問題にしているのは、日本が西洋という外部世界の働きかけを契機として、非主体的に国を近代化していったこと自体ではなく、むしろそれによつてもたらされた変化が、日本人の生活の連続性のなかに位置づけられないということである。「日本の開化は自然の波動を描いて甲の波が乙の波を生み乙の波が丙の波を押し出すやうに内発的に進んでゐるかといふのが当面の問題なのですが残念ながらさう行つて居ないので困るのです」と漱石は語っている。

ここで漱石が「困る」といつているのは、日本の開化が国民の意識の進展に「自然の波動」を描く形で進んでいないということである。注目すべきなのは、漱石が日本の開化の進展を、人間の意識の線的な運動性になぞらえて語っていることだ。漱石の思索における一つの特徴は、個人と国

家を支えるものを、ともに有機的な生命の流れのイメージによって捉えるところにある。それは同時代の思想であったウィリアム・ジェームズやベルクソンの言説に漱石が影響を受けていたことの結果として見なされる³。しかしジェームズにおいてもベルクソンにおいても、意識の流れは基本的に個人の同一性を支える条件として措定され、個人の生活史と国家の進展を類比的に連関させるという発想は漱石独自のものであるといつてよい。講演『文芸の哲学的基礎』（明治四〇）では漱石は、「私」とは「意識の連続して行くもの」の謂であると規定し、その上で「吾々の生命は意識の連続であります。さうしてどう云ふものか此連続を切断する事を欲しないのであります。他の言葉でいふと死ぬ事を希望しないのであります」と語っている。こうした、いずれも流れ、進んでいく連続性によって個人と国家の同一性が捉えられている。

興味深いのは、こうした複数の〈流れ〉の間にある齟齬やズレが、夏目漱石の個人史においても強く認められることである。漱石は初め漢文学を志したものの、大学予備門時代に時流に合わせるべく英文学に転じている。にもかかわらず、漱石が専門的な英文学にどうしても合一しない違和感を感じていたことは『文学論』「序」（明治四〇）で述べられるとおりである。そこに表白されるところによれば、漱石は漢文学を十分に味わうことができる反面、自身の職業的な領域となった英文学に対しては馴染めないものを感じ、そのため結局この二つの文学を異質な世界として考えざるをえないという認識に達したのだった。そこから日本、中国、イギリスといったローカリティーを越えた形での文学の原理を考察するに至ったわけだが、その基本的な理念を表現している、観念的な焦点と情緒的な焦点の融合を意味する「F + f」という図式についてはここでは言及しない。

重要なのは同じ言語表出として成り立っているものに対して、漱石が異質な距離を強く感じ取っているという事実である。それは外部の対象に対して、漱石が自己の同一性に強く合一してくるものと、そうでないものとの差異を鋭敏に嗅ぎ分けていたということにほかならない。

2

夏目漱石の生活史において特徴的なのは、そうした感覚を作動させる〈移動〉ないし〈越境〉の契機が、きわめて多様な形で折り重なっているということである。すでに触れた、夏目——塩原——夏目という、幼時から青年期にかけての〈家〉の移動と、漢文学から英文学への移動はその端的な例だが、勤務先の変化に応じて、二十代から三十代にかけて漱石は松山と熊本に居住の場所を転じ、さらに明治三十三年（一九〇〇）から三五年（一九〇二）にかけては、日本からイギリスへと生活の環境を大きく変化させることになった。そしてこの〈移動〉は、周知のように漱石に著しい違和感をもたらし、ノイローゼ状態へと彼を追いやらねばならなかった。さらにそうした努力によって得た英文学研究者としての居場所も、明治四〇年（一九〇七）四月に東京朝日新聞社に入社することによって放擲され、漱石は職業的作家としてまた別の居場所に〈越境〉していくことになる。

朝日新聞社への入社によって、漱石の個人的な生活史における移動には一応の終止符が打たれることになる。しかし漱石が身を置く日本は、日清、日露の二つの戦争後も〈移動〉と〈越境〉を止めることなく、中国、朝鮮等のアジア諸国を対象とした帝国主義的な侵略の志向のなかを進みつつける。看過することができないのは、こうした漱石における私的な次元

と国家的な次元における〈移動〉や〈越境〉が、イメージ的に融合しつつ漱石の作品群に表象されていることである。とりわけ活動や生活の場における様々な変化を生じさせていた時期に書かれた初期の作品には、しばしばこうした着想が前景化された形であらわれている。

その時漱石が取ることの多かつたのが、主人公を〈日本〉の寓意とし、その生活、行動における変化に、日本が近代において経つつある推移を重ね合わせて表現するという手法である。朝日新聞入社翌年に書かれた『三四郎』（明治四二）はその代表例の一つとして挙げられる。この作品の主人公である小川三四郎は、熊本から上京して東京帝国大学に入学するが、この〈地方〉から中央の〈都会〉への〈越境〉は、明らかに日本が進みつつある〈前近代〉から〈近代〉への移行を暗喩している。その端的なあらわれとして、列車に乗ってくる女性の肌が、九州から離れるにしたがつて「次第に白くなる」という変化が冒頭に記されている。もちろんこれは現実的な観察というよりも、東京に近づくにつれて〈都市化〉あるいは〈近代化〉の度合いが高まってくるという変化の比喩的な表出以外ではない。この作品のなかでは「白」は「光」の換喩としても機能する、文明化、西洋化を象徴する色彩としてあらわれる。そのため西洋科学の先端に関わっている野々宮は「光線の圧力」を研究している⁴のであり、一方高い見識を持ちながら市井に埋もれている広田先生は「偉大な暗闇」と評されるのである。三四郎自身は〈黒い〉世界から〈白い〉世界に移動した後も、最後までとまどいつつ主体的な行動者となりえないが、それが西洋化としての「開化」を十分に消化していない、明治四十年代の日本の状況を暗示していることはいままでもない。

一方『三四郎』の二年前の明治三九年（一九〇六）に発表された『坊っ

ちゃん』の主人公は、東京から松山と思しき四国の小都市へ〈越境〉していくものの、この〈越境〉は彼に「江戸っ子」という空間的な自己同一性を覚醒させ、一年もたたぬ内に彼は「不浄の地」としてしか見なされないこの地方都市を去つて、元の居場所に戻つてしまう。三四郎が熊本という出自の地に戻ろうという気を起こさないことと重ね合わせると、この『坊っちゃん』の展開には、漱石の〈地方〉に対するあからさまな差別意識が浮上しているようにも見られる。おそらく漱石は生活の場としての東京を愛していたが、生活者としての好悪の表明としてではなく、作中の虚構の要素として坊っちゃんの帰還を眺めれば、それは第一に坊っちゃんが単純明快な正義漢としての〈坊っちゃん〉であることの困難さを示唆するものにはかならない。坊っちゃんは〈松山〉（以下坊っちゃんが赴いた四国の都市をこのように表記する）の中学校を去つた後、教師の職自体から離れて、「街鉄の技師」になるのである、この手記を綴っている時点ではすでに坊っちゃんは熱血漢の青年教師ではなくなっている。すなわちこの作品は、そこに描き出されている主人公が、「現実には存在しえぬ「妖精」」（江藤淳『夏目漱石』新潮社、一九七四・二）の如き存在であるという前提のもとに成り立っているものであり、叙述の構造そのものに、坊っちゃん的なものを相対化する要素がはらまれている。いままでもなく現実の夏目漱石自身は決して坊っちゃん的な人物ではなく、本人も『私の個人主義』（大正六）で認めているように、むしろ教頭の「赤シャツ」に近い輪郭を持っていた。そこから坊っちゃんがあくまでも反現実的な虚構であることが見て取れるが、逆にいえばその虚構性こそ、漱石が造形において託した現実世界に対する認識の方向性があらわれているはずである。

そしてそうした漱石の現実認識を寓意的に構図化した世界として『坊っ

ちやん』を捉える視点が近年複数の論者から出され、一つの流れをつくっている。そのなかでも興味深い論考として挙げられるのが小谷野敦の『坊つちやん』の系譜学（『夏目漱石を江戸から読む——新しい女と古い男』中公新書、一九九五・三、所収）であろう。ここで小谷野は坊つちやんを江戸幕府の瓦解とともに滅びていった「武士」の形象として眺め、官軍的な存在である赤シャツらと対抗するものの、勝利することはできずに去っていく物語としてこの作品の展開を位置づけている。この論の前提をなすのは、坊つちやんが通念に反して「江戸っ子」ではないという視点だが、それは江戸っ子が尊重する「粹」と「いなせ」という美学を坊つちやんが満たしていないからである。坊つちやんは反対に「野暮な正義漢」であり、江戸っ子的な美学はむしろ赤シャツの側に認められるとされる。それは赤シャツが江戸っ子である漱石自身を踏まえていることから納得されるが、小谷野によれば、坊つちやんは「これでも元は旗本だ」と語り、多田満仲を始祖に持つと自身で認識するような武士の系譜を身に受けているとともに、時代性を限定すれば、幕末の闘争における佐幕派の武士になぞらえられるという。彼と共闘して赤シャツらと対抗する同僚の「山嵐」が「会津」の出身であるというのは当然それと合致する設定となる。そして明治維新とともに崩壊していった「武士の夢」を描き出すことが、『坊つちやん』に込められた密かな動機として推察されている。

ここで小谷野が提示した図式はきわめて明快であり、一定の説得力を持つている。とりわけ坊つちやんを江戸っ子ではなく「武士」の形象として眺める視点は、それまでの『坊ちやん』観を組み替える意味を持つといえよう。もともと坊つちやんを佐幕派武士になぞらえる視点自体は、すでに昭和四十年代に平岡敏夫によって出されていた⁵。平岡においては断

片的な指摘にとどまっていたこの視点を、作品全体を貫く起点として構造化したところに小谷野の独自さがあつたといえよう。小森陽一はこの小谷野敦の論に呼応する形で、坊つちやんをやはり「時代遅れの士族意識を過剰に持っていた」子供がそのまま成長していった姿として見なしている。坊つちやんの内には「旧佐幕派の恨み」が残存しており、そのはけ口として語られる挿話が、「山城屋」の勘太郎との喧嘩であつたとされる。「山城」は京都を示す地名であり、この地名を屋号に持つ質屋である「山城屋」を「経済的基盤を失った元旗本をはじめとする近隣の士族に金を貸すことで成り上つていった店」として小森は推定している。そのため勘太郎を打ちのめすことがその「恨み」に対するカタルシスとなる。そして作品の展開として語られる行動における坊つちやんの「元は旗本」という「士族意識」が透かし見られる挿話として、小森は「宿直事件」を重視している。つまりこの時代の「宿直室」とは、第一に天皇皇后の「御真影」と教育勅語を奉置しておく場所であり、火事の際にそれらを守るために教職員が命を落とすことも二再ではなかった。この〈神聖〉な部屋で寝泊まりする坊つちやんの元に生徒たちはイナゴを放り込んで騒動を起こし、また坊つちやん自身は宿直の仕事に嫌気がさして、部屋を空けて温泉に行ってしまうのである。小森はこうした出来事の叙述から、「おれ」という中学校の数学教師が、徹底して、反「教育勅語」的な男であつたことだけは確認しておく必要があるだろう」と述べている⁶。

小谷野敦と基本的に同一の方向性を取りながら、作中の具体的な表象に滲出している歴史的文脈を読み取る小森陽一分析は、巧みというほかはない。けれどもここで疑念を呈する余地があるのは、二人の論に共通して差し出されている、坊つちやんを佐幕派武士の寓意として見なす前提

そのものである。両者に共通するのは、薩長を中心とする反幕府勢力によつてつくり上げられた明治政府に対する強いルサンチマンが坊つちゃんに託されているという把握であり、それが小谷野においては維新の達成とともに失われた「武士的なもの」への郷愁という形で捉えられ、小森においては天皇制への違和感として焦点化されている。このうち小谷野の視点についていえば、『坊つちゃん』執筆時においてなぜ漱石が、江戸の「武士的なもの」への郷愁を語らねばならないかは不明であるといわざるをえない。むしろ青年期以降の漱石の関心事は、一貫して国際関係、とりわけ対西洋における日本の近代国家としての成熟にあつた。ロンドンに在る際、一九〇二年二月のヴィクトリア女王の葬儀の後で、日記に「夜下宿ノ三階ニテツク／＼日本ノ前途ヲ考フ」（明治三四・二二七）と書き付け、その約二ヶ月後には「日本ハ三十年前ニ覺メタリト云フ然レドモ半鐘ノ声デ急ニ飛ビ起キタルナリ其覺メタルハ本当ノ覺メタルニアラズ狼狽シツ、アルナリ只西洋カラ吸収スルニ急ニシテ消化スルニ暇ナキナリ、文学モ政治モ商業モ皆然ラン日本ハ真ニ目ガ醒メネバダメダ」（明治三四・三二六）と記しているように、漱石の眼はつねに日本の「前途」に向けられていた。『坊つちゃん』が発表された明治三十九年の「断片」にも「明治ノ三十九年ニハ過去ハナシ。単ニ過去ナキノミナラズ又現在ナシ、只未来アルノミ」という記述が見られるが、こうした日本の未来を憂慮する意識を抱えつづけていた作家が、〈覚醒〉によつて真に脱却しなくてはならないと考えていた旧時代への郷愁を、主人公の造形に託したとは考え難いのである。

そもそもこの作品の時間は日露戦争の終結時、つまり明治三十八年（一九〇五）に設定されており、その時点で「二十三年四ヶ月」という年齢である坊つちゃんは明治二五年（一八九二）に生まれている。漱石自身

より一回り以上若い世代に設定された青年に、江戸末期の抗争の文脈が託されていると見なすのが自然な把握とはいえないはずである。また坊つちゃんを佐幕派武士の形象と見なし、それゆえに会津出身である山嵐と共闘しえたと思定した場合、おのずと彼らの敵役となる赤シャツや野だいこらは薩長に代表される反幕府勢力の暗喩として位置づけられることになる。けれどもどのように見ても赤シャツや野だいこを倒幕派武士の暗喩として捉えることはできず、また小谷野自身が「西郷隆盛こそが、「最後のサムライ」であつた」と述べているように、江戸幕府を打ち倒した薩長の下級武士たちのなかにも、「武士的なもの」は明瞭に息づいていた。もつとも小谷野も赤シャツたちが反幕府勢力を象つているとはいつておらず、むしろ明治維新とともに「武士的なもの」を無化していった「近代化政策」の暗喩として捉えようとしている。けれども今述べたように、漱石のなかへ〈近代〉を否定して〈江戸〉に還ろうとする永井荷風の心性は不在であり、むしろ達成されるべき近代化が四十年近くを経てもなされていないことに漱石は焦慮していたのである。

小森陽一の論考においても、坊つちゃんを佐幕派武士として見立てる前提と、作品に描かれる対立の構図との間にズレが見られる。つまり質屋の「山城屋」の屋号への考察で、「佐幕派と官軍派、江戸と京都、徳川将軍と天皇という対立が、「おれ」の家と「山城屋」の対立の仲に透けて見えてくるのである」と述べているように、小森が見出そうとする坊つちゃんに込められた寓意的な位置づけは、もっぱら物語の前段階的な挿話に示されている。けれども小森もやはり、幕末から維新にかけての対立の構図を、内容の主要部分をなす、坊つちゃんと赤シャツらとの関係において位置づけていないのである。小森の論考では赤シャツはむしろ近代の学歴社

会における勝利者としての位相を与えられており、別個の構図のなかで両者の関係が捉えられている。結局いずれの論考においても、佐幕派武士として坊っちゃんを見立てる寓意は、彼と赤シャツとの対立という、作品の中心的な構図を十分に説明しているとはいえないのである。

3

問題は『坊っちゃん』を貫流している対立の構図を、江戸——明治という時間軸のなかに位置づけようとしたことにあつただろう。繰り返すようにだが、夏目漱石は明らかに未来に至る〈近代〉への志向を持つ作家であり、前時代はあくまでも乗り越えられるべき対象として意識されている。にもかかわらず、日本がその〈前近代〉の残滓のなかにとどまりつづけていることが、漱石に創作の動機を提供していたのである。そしてこの〈前近代〉から〈近代〉への〈越境〉の成就の度合いは、あくまでも対西洋の比較関係のなかで測られるのであり『坊っちゃん』もそうした漱石の〈近代批判〉の産物として捉えられる必要がある。その時テクストの読解の姿勢として我々が取るべきなのは、断片的な言葉や事物を歴史的な文脈に結びつけることよりも、一定のまとまりをもつて提示されている表象の物語っているものに対して、分析の眼を向けることであろう。

すなわち『坊っちゃん』の主人公とは、何よりも外部からもたらされる働きかけや情報を十分消化することなく、それらに対して短絡的に反応してしまいがちな人物である。そうした性向を彼が少年期から成人した現在に至るまで保持しつづけていることが、叙述の冒頭に明示されている。

親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりして居る。小学校に居る

時分学校の二階から飛び降りて二週間程腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出して居たら、同級生の一人が冗談に、いくら威張つても、そこから飛び降りることは出来まい。弱虫やーい。と囃したからである。小使に負ぶさつて帰つて来た時、おやぢが大きな眼をして二階位から飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云つたから、此次は抜かさずに飛んで見せますと答へた。

親類のものから西洋製のナイフを貰つて奇麗な刃を日に翳して、友達に見せて居たら、一人が光る事は光るが切れさうもないと云つた。何でも切つて見せると受け合つた。そんなら君の指を切つてみると注文したから、何だ指位この通りだと右の手の親指の甲をはずに切り込んだ。幸ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かつたので、今だに親指は手に付いて居る。然し創痕は死ぬ迄消えぬ。(一)

ここに語られる、外部からの指喉に対して、自身の身体を傷つける可能性を顧慮せずに即座に反応してしまう「無鉄砲」な性格が、青年期に至るまでこの人物を貫流し、その同一性をなしている。その連続性のなかで彼は四国の中学校に赴き、そこで生徒たちのからかいに対して直情的に立腹し、教頭をつぶやく言葉を真に受けて、同僚と対立に陥つたりするのである。もしこうした輪郭が意識的に付与されている人物、つまり坊っちゃんが佐幕派武士の暗喩であるならば、比喩の論理からいって、こうした性格が佐幕派武士にも多少とも分け持たれている必要がある。けれども幕末の抗争において幕府側についた武士たちが、坊っちゃんのような「無鉄砲」な短絡性によつて特徴づけられるとはもちろんいえない。たとえば坊っちゃん

んの家と同じ旗本で佐幕派の武士であった小栗上野介は、やはり直情的な気質であったが、使節団の一員として赴いたアメリカでその分析的な知性を賞賛され、また貿易と国防の重要性を早くから認識して横須賀ドックを造らせるような先見性を備えていた。また同じく旗本の幕臣であった榎本武揚は、知られるように幕府海軍を率い、北海道に逃れた後は独自の共和国を打ち立てようとしたものの、降伏の後には〈変節〉とも映る政治的姿勢の転換を示し、明治政府の要職を歴任する人物として新しい時代を生き延びていった。もちろん彼らは佐幕派武士として抜きん出た存在であり、その足跡を佐幕派武士の輪郭として一般化することはできないだろう。しかし少なくとも幕府側の武士たちの行動が、倒幕側のそれよりも直情的な短絡性を帯びていたということとはできないはずである。

確かに『坊つちゃん』の語り口は平岡敏夫が指摘するように、旗本であった勝海舟の父親である勝小吉の『夢酔独語』（天保一四（一八四三））に似ており、この人物が漱石の念頭にあった可能性はある。けれども小吉自身は旗本とはいってもほとんど無頼の人物であり、微禄のあまり生活も自身で立てることを強いられ、少なくとも幕府に忠誠を尽くすという型の武士ではなかった。また勝海舟も幕臣として幕府側で行動するものの、幕府に対してはむしろ批判的な視点を持ち、また西郷隆盛らとの交渉を通して江戸城を無血開城に導く政治的手腕を發揮している。さらに勝は維新後は様々な要職に就いて明治政府の中樞を担う存在となり、伯爵の爵位まで授かっている。一人称の「おれ」で語られる勝海舟の『氷川清話』（明治三〇）も、『夢酔独語』の語り口とある程度近似しているが、早くから養われていた海舟の幕府の現況に対する批判的な意識の底には、少年期に受けた小吉の感化があったといわれる。その意味では勝海舟こそが『坊

つちゃん』の主人公を想起させる「親譲り」の気質のなかを生き抜いて、国家を率いるまでになった人物であった。

もし漱石の念頭に勝小吉、海舟父子の存在があったとすれば、それはむしろ「佐幕派」的な心性と逆行する志向が坊つちゃんに託されていることを物語っている。そしてさらにいうならば、坊つちゃんを逆に倒幕派、すなわち〈薩長〉の側に見立てることも可能なのだ。つまり幕臣でありながら明治維新後は明治政府の要人となっていた勝海舟を坊つちゃんの造形の背後に想定しようように、坊つちゃんを倒幕勢力によって打ち立てられた明治政府——明治日本に対立する位置に置かねばならない理由はない。むしろつねに対西洋における日本のあり方に腐心していた漱石にとって、〈日本〉は同一化の対象である。現に漱石は明治三八、九年頃の「断片」に「吾は日本の人なり、天下の民なり」と書き付けている。

『坊つちゃん』も漱石のこのような意識から生み出された作品にほかならない。この作品にこうした視点を投げかけようとする際に、尊重すべきなのは、坊つちゃんがおこなう東京から〈松山〉への移動が、実は漱石の「松山体験」ではなく、むしろその五年後に訪れる「ロンドン体験」を映し取っていると、平岡敏夫の把握である。平岡は漱石自身の松山での体験と、『坊つちゃん』で語られる主人公の経験との差異を踏まえた上で、この作品に語られるものが、むしろ明治三三年（一九〇〇）から明治三五年（一九〇二）にかけての、漱石のロンドンでの体験に照応する性格が強いことを指摘している。つまり坊つちゃんは〈松山〉で中学校に勤務し始めてから、つねに自己の行動を生徒たちに監視されているように感じつつ、「神経衰弱」と周囲に評されるような状態になるが、それはとりもなおさず漱石自身がロンドンで陥っていた状態と合致するものにほか

ならない。こうした視点から平岡は『坊つちゃん』の内容が、漱石のロンドンでの体験を素材化したものであると主張しているが、そうした照応の意味するものについては十分に考察されているわけではない。帰結的な感想として、東京——ロンドンの距離を東京——四国の距離に矮小化することによって、「漱石の英国嫌悪、批判」が表出されることになったという指摘がなされるにとどまっている。もつともこの指摘は妥当なものだが、重要なのはやはり、この漱石の「英国嫌悪、批判」がここでのどのように表象されているかという具体性であり、坊つちゃんの造形に託された寓意性も、そこから浮び上がってくるはずである。逆にいえば、坊つちゃんを江戸末期の抗争とは別個の文脈を担う存在として捉えることによって、漱石がこの作品に込めた「英国」に代表される西洋諸国に対する意識が明確化されるはずなのである。

その際あらためて着目してもよいのは、この作品に付された「坊つちゃん」という表題である。看過しえないのは、この表題が語り手の坊つちゃんが積極的に選んだものではなく、むしろその外側からメタレベル的に与えられた性格を持つことである。その差異は先行する作品である『吾輩は猫である』の表題と比べても明瞭である。「吾輩は猫である」という表題はこの作品の語りの第二行と同じであり、そこに〈猫〉である語り手の明確な自己規定が提示されている。〈猫〉であるとは、人間社会において主体となれない微少な存在でありながら、そこから疎外され切ることもなく、周縁的な位置にとどまりつつ観察者的な眼差しを投げる者の謂であることはいままでもない。この作品の語り手は、自身がそうした周縁的な観察者であることを「吾輩」という傲然とした響きを持つ一人称代名詞によって宣言しているのである。それに対して「坊つちゃん」という呼称は

決して一人称の語り手の肯定的な自己認識を表現していない。展開の終盤で美学教師の野だいの言葉に彼は「野だの畜生、おれの事を勇み肌の坊つちゃんと抜かしやがった」(十二)と歯ぎしりするのであり、彼にとつて「坊つちゃん」は否定の響きをもつて聞こえる呼称でしかない。もちろん女中の清が彼のことを「坊つちゃん」と呼ぶことについては坊つちゃんも受け入れているが、それは現実に子供として過ごした家のなかにおける位置づけだからである。この非社会的な呼称が、職場という社会的な場でも適用されているという事実は、坊つちゃんが今なおその域にとどまっていることを告げ、彼を苛立たせている。またそれが彼をさらに未成熟な〈坊つちゃん〉として際立たせているのである。

したがって「坊つちゃん」という、外部からの呼称が表題としてこの作品全体を統括しているのは、そのこと自体が、主人公が明確な自己認識を持ちえず、そうしたメタレベルの眼差しによって客体的にしか位置づけられない存在であることを物語っている。そして作中で坊つちゃん自身がこの呼称を否定するにもかかわらず、それになお作品の表題の位置を与えられていることは、そのメタレベル性を二重にしている。つまり自分が「坊つちゃん」ではないという坊つちゃんの反駁を、この表題自体が封じ込めているのであり、そこに主人公の主体的な自己規定を二重に相対化する眼差しが作動していることが見て取れるのである。

そしてこの、主体的な自己認識を自身に与えることができず、対他者的な関係において未熟さを示しつつける主人公の輪郭こそが、漱石の捉える明治日本のイメージであることはいままでもない。先にも引用したように、ロンドン留学中の日記に「日本ハ真二目ガ醒メネバダメダ」(明治三四・三・一六)と書き付け、『坊つちゃん』が発表された明治三十九年の「断

片」に「遠クヨリ此四十年ヲ見レバ一弾指ノ間ノミ。(中略) 明治ノ事業ハ是カラ緒二就クナリ。今迄ハ僥倖ノ世ナリ。準備ノ時ナリ」と述べるような意識が坊っちゃんの造形の基底にあることは疑いない。漱石の認識においては、四十年を閲しようとしている日本は、未だに本当には「目ガ醒メ」てはいない初発の段階にあり、近代国家として成熟していくためには、やつと「準備ノ時」を終えたにすぎないのである。もちろん日本はそうした段階から脱するための努力を払いつづけたが、中国とロシアとの戦争に勝ち、イギリスとも同盟関係を結んだ明治三九年の段階に至っても、日本が近代国家としての成熟を手にはしているとは到底漱石には見なし難かった。五年後の明治四四年の講演『現代日本の開化』においても漱石は日本の近代化、つまり「開化」を「外発的」であると評さねばならなかったが、一貫した自己同一性の上立つことなく、外側からの働きかけに反射的に反応するという、徹底して「外発的」な行動をとりつづける存在こそが、『坊っちゃん』の主人公にほかならなかつたのである。

4

そしてこのように坊っちゃんの寓意性を捉えるならば、彼が佐幕派武士に逆行する存在として眺られることも明らかにするはずである。つまり坊っちゃんの輪郭が明治日本の進み行きを示唆しているとすれば、それは当然明治日本を形づくっていった人びとと強い重なりを持つことになる。それはおのずと〈佐幕派〉よりもむしろ〈倒幕派〉つまり〈薩長〉の系譜を浮び上がらせることになるのである。また坊っちゃんには小谷野敦がいうように確かに〈さむらい〉としての性格が付与されているが、それは坊っちゃんを〈明治日本〉に見立てることによって、より拡張した次元

で意味づけられる。つまり日本は明治に入つて中国、ロシアという二つの大国と〈いくさ〉をしたのであり、その意味ではまさに〈さむらい〉としての行動に身を投じていた。日清戦争も日露戦争も、ともに戦前は日本の力が侮られており、その低い評価を覆すべく日本は戦いを開始し、結果的にはどちらの戦争においても日本は勝利を得ることになった。『坊っちゃん』は日露戦争終結の翌年の明治三九年に書かれており、作品の時間的な舞台も、漱石が松山に滞在していた時点から約十年後にずらされ、日露戦争終結時に設定されている。そうした意識的な設定をおこなっている作者が、遂行されたばかりの戦争と無関係に〈さむらい〉を想起させる主人公を登場させているということはありえないはずである。

一方歴史的な〈さむらい〉の世界からこの作品が断ち切られているわけでもない。漱石のなかにある、〈近代〉が〈前近代〉の残滓を振り切れない形で進んでいつているという〈連続性〉の認識は、『坊っちゃん』ではある意味では積極的な表出に転化されている。『道草』とは反対に、彼の存在を支えるべき基底としての近代以前の時間の堆積は、坊っちゃんに付与された〈戦う者〉としての〈さむらい〉の系譜をもたらししているからである。冒頭にあらわれる「親譲りの無鉄砲」という表現も、その地点から捉え直すことができる。一読して明らかのように、坊っちゃんと、彼の「顔さえ見れば貴様は駄目だ駄目だと口癖の様に云つてゐた」(二) 父親の間には、連続ではなく不連続が仮構されており、坊っちゃんの「無鉄砲」な性格が現実の「父」から〈譲られた〉ものであるということはない。したがってこの「親」とはより観念的な次元における〈祖〉^{おや}的な存在として仮構されることになる。小谷野敦はその〈祖〉を坊っちゃん自身の言葉を受ける形で、清和源氏の始祖である多田満仲に見立てているが、坊っちゃんを明治日本

の寓意として捉えた場合、その〈祖〉はもう少し近接する時代に求められる。その時坊っちゃんの〈祖〉も、あらためて「親」的な親近性のなかに置き直されるのである。

すなわち平岡、小谷野、小森らの見方に反して、坊っちゃんの「親」とは、明治政府を打ち立てた倒幕勢力、つまり〈薩長〉そのものにほかならないからだ。それは歴史的な経緯によって想定されるだけでなく、現実に薩摩、長州両藩が幕末においてかなり「無鉄砲」な行動を起こしているという、イメージ的な照応によっても補強される連関である。一八五二年の「黒船」の来航以来、次々と外国船が日本に来航し、通商を求めたが、この西洋諸国の〈挑発〉に対して、久坂玄瑞を中心とする長州藩の攘夷派は、文久三年（一八六三）五月一〇日単独でアメリカの商船を砲撃するという拳に出た。それにつづいてオランダ、フランスの軍艦を砲撃したが、いずれも撃沈させるには至らなかった。それに対し同年六月からアメリカ、フランスは反撃を開始し、翌元治元年（一八六四）八月五日には英・米・仏・オランダ四国の連合艦隊が下関を砲撃し、またたく間に砲台を破壊し尽くした。また薩摩藩でも同時期の文久三年に、生麦事件の收拾についてイギリスと対立し、交戦したものの、市街地の一割を焼失する打撃を蒙る「薩英戦争」を起こしている。この二つの局地的な戦いは、薩長の攘夷派にその不可能を教え、以後彼らが開国派へと転じていく契機となったが、中国、ロシアと戦いを交える以前に、江戸時代の末期に日本が外国とこうした戦争を起こし、それによって傷を負った前歴を持つことは見逃すことができない。つまり明治日本がいずれも戦前には無謀とも思われた大国との戦争を遂行する前に、その「親」ともいうべき〈薩長〉はともにも西洋の列強に対して戦いを仕掛けるという「無鉄砲」な行動に出てい

るのである。その意味では確かに大国との戦いを辞さない明治日本の「無鉄砲」さは「親譲り」のものにほかならなかった。人物的な照応においても、アメリカ船への砲撃を仕掛けた中心人物であった久坂玄瑞について、作家の古川薫は「志向や行動が直線的で、悪くいえば単純だ」（『幕末長州藩の攘夷戦争』中公新書、一九九六・二）と評しているが、これが『坊っちゃん』の主人公を想起させる性格であることはいうまでもない⁷。

そう考えると『坊っちゃん』の冒頭で、事実的な関係性に逆行する形で「親譲りの無鉄砲」という性格を坊っちゃんがみずから語っていることの意味を理解することができる。さらに『坊っちゃん』の叙述には、端的に〈薩長〉とくに〈長州〉とつながる痕跡が残されている。それは中盤で坊っちゃんが引つ越していく先の下宿屋の名前である。ここで坊っちゃんは主人の老夫婦に「双方共上品だ」という良い印象を抱き、とりわけ婆さんには清に抱くような懐かしさまで感じている。そしてその婆さんに対して彼は、それまでとは違った落ち着きを見せて世間話にも興じたりするのだが、この下宿屋の名前は「萩野」なのである。「萩」が長州藩の中心として、幕末に吉田松蔭、高杉晋作、桂小五郎（木戸孝允）らの人材を輩出した地であることは述べるまでもない。下関での砲撃事件を起こした武士も萩の藩兵たちであり、久坂玄瑞自身も萩の出身なのである。しかも長州藩では攘夷熱の昂揚のなかで、奇兵隊を初めとする、身分に関わらない有志による軍隊が次々と組織されていたが、そのなかには「遊撃隊」「御盾隊」などと並んで「萩野隊」も存在したのである。

またこの作品の叙述においては、「二」以降の章で〈松山〉での坊っちゃんの経験が語られ、彼の「無鉄砲」な氣質を物語る挿話はもっぱら「一」章に集中しているが、この〈過去〉と〈現在〉の時間的な距離が、坊っちゃん

んにおける「親」と「おれ」の関係に相当している。つまり「二」章で語られる少年期の「無鉄砲」な行動の数々は、坊っちゃんに受けた（さむらい）の系譜を示唆するとともに、それ自身が教師となり、地方都市に赴任した時点での坊っちゃんをもたらした「親」として見ることができると。そのことを示唆するために、現実の親との気質的な非連続が強調されているのである。実際冒頭で語られる、他人の挑発に乗る形で二階から飛び降りたり、ナイフで自分の指を切ったりして傷を負ってしまう挿話は、無謀にも単独で西洋の強国に戦いを挑んで手ひどい反撃を受けてしまう、薩長両藩が経験した戦争を想起させる。こうした〈戦い〉への志向を引き継ぐ形で、明治時代の戦争も遂行されることになったという認識が漱石の内にあつたとも考えられるが、そうした志向の連続性が託された存在である点で、『坊っちゃん』のはらむ寓意性は〈倒幕派〉の側に傾斜しているかざるをえないのである。

坊っちゃんの表出に込められたものをこのように眺めていくと、彼に敵対する赤シャツの位置づけもおのずと明瞭になる。赤シャツのモデルが、英文学者でもあり、イギリス留学の経験を持つ漱石自身であり、また赤シャツ自身も横文字の好きな西洋かぶれであるという輪郭は、端的に彼を〈イギリス〉に代表される西洋列強の暗喩として括り出すことになる。赤シャツを近代の官僚社会の象徴として位置づける小谷野敦や小森陽一の把握は否定されるべきではないが、その明治の官僚社会が西洋を模してつくられている以上、坊っちゃんとの対比のなかで、赤シャツ自身を西洋の側に見立てても矛盾はないはずである。そしてむしろそう眺めることによって、『英国嫌悪、批判』（平岡敏夫）に集約される、漱石の西洋に対する屈折した心性を捉えることができる。おそらく赤シャツは、漱石自身の〈イギ

リス嫌い〉を核として、明治期の日本人が抱いていた西洋列強に対するルサンチマンが集約された形象であると考えられる。漱石も一人の日本人としてこうした感情を分け持っていたのであり、だからこそそれを底流させたこの作品が、現在に至るまで代表的な〈国民文学〉の一つとしての位置を持ちつづけているのである。

赤シャツが〈西洋列強〉の暗喩として前景化されるのは、もっぱら後半の展開においてである。つまり赤シャツは英語教師の「うらなり」の婚約者であつた「マドンナ」を奪い取り、うらなりを九州の延岡に追いやってしまう。そしてこの事件で赤シャツに対する感情を二層悪化させた坊っちゃんは、数学教師の山嵐と共闘して、芸者の出入りする宿屋の前に張り込み、赤シャツらがそこからでてきたところを取り押さえるのである。こうした終盤の坊っちゃんの行動は、当然〈西洋列強〉へのルサンチマンに対するカタルシスとしての意味を持つ。すなわちうらなりからマドンナを奪い取る赤シャツの行動は、明らかに日清戦争後の三国干渉を映し取つたものであり、最後の赤シャツの〈成敗〉は、前年に終結した日露戦争を寓意化していることのできるからだ。日清戦争の勝利によって得た遼東半島を、ドイツ・フランス・ロシアの干渉によって直ちに返還させられた事態が、当時の日本人に大きな屈辱を感じさせ、そこから日露戦争に至る十年間を「臥薪嘗胆」の期間として過すことになったのはよく知られている。『坊っちゃん』の後半の展開は、この三国干渉から日露戦争への歩みを暗喩するものとして受け取られる。この作品の時間的な設定が、漱石が松山にいた日清戦争の終結時から約十年ずらされ、意識して日露戦争の終結時に置かれているのも、この図式を浮び上がらせるため以外ではない。

もつともその場合、明治日本を表象する存在が坊っちゃんであれば、赤シャツは坊っちゃん自身から何ものかを奪い取らねばならないということになるかもしれない。けれども漱石はその比喩的イメージの論理においても、周到的な布置を敷いている。つまり赤シャツから婚約者を奪い取られるうらなりは、坊っちゃんの分身にはかならないからだ。もちろん坊っちゃんとうらなりは気質的に正反対であり、他人のいいなりになりがちな大人しいうらなりが、周囲と衝突しつづける坊っちゃんの分身であるというのは奇妙な見立てかもしれない。けれどもむしろそこにこそ漱石の配慮が込められている。周囲の人間に反感を覚えてばかりいる坊っちゃんが、うらなりに対してはなぜか好意的な眼を注ぎつづけるという描き方もそこから生まれている。顔色が悪く「青くふくれて居る」(二)という容貌で、自己主張もほとんどしないこの人物が、坊っちゃんの辛辣な批評の餌食にならず、逆に「おれは君子と云ふ言葉を書物の上で知つてゐるが、是は字引にある許りで、生きてゐるものではないと思つてたが、うらなり君に遭つてから始めて、やつぱり正体のある文字だと感心した位だ」(六) という評価を受けるのは不自然にも見える。けれどもこの強い親近感、彼を坊っちゃんを裏返した分身として見ることによつて、理解することができると「うらなり」という呼称自体がその関係を反映しており、文字通り彼は坊っちゃんのへうら・なりへの人物なのである。それを傍証するように、坊っちゃんへうらなりを最初に見た時にすでに、「おれとうらなり君はどう云ふ宿世の因縁か知らないが、この人の顔を見て以来、どうしても忘れられない」(六) という、根拠のない強いつながりを覚えている。

具体的な行動においても、うらなりが他者に自己主張することができないだけでなく、坊っちゃんも自分の意思を言葉に表すことが不得手なのであり、会議で「宿直事件」における生徒への処分を寛大にしようという野だいの意見に対して、「私は徹頭徹尾反対です……」と云つたがあとが急に出て来ない。「……そんな頓珍漢な、処分は大嫌です」とつけたら、職員が一同笑ひ出した」(六) という不体裁を晒してしまう。その意味で二人とも自己表出の不如意を抱えた人間同士としての重なりを付与されているのである。さらにうらなりが英語教師であるというのは、坊っちゃんの起点にいる漱石自身とつながる設定であり、その意味でも二人の登場人物は間接的な呼応を示している。

結局この弱々しい人物は、〈開化〉の進展によつて〈強国〉へと成り上がっていくながらも、西洋列強に対しては明確な自己主張をすることができず、そのいいなりになる無力さをさらけ出してしまう、明治日本の否定的な側面の寓意化にほかならない。中国への勝利によつて得た領土をたちどころに西洋の強国に奪われてしまった三国干渉の屈辱は、何よりもそうした対西洋における自国の無力さを日本人が思い知らされる契機であった。帝国主義的な流れに参加する形で、空間的に外部へと〈越境〉していきながら、その〈越境〉を容易に遮断してしまう強大な力が存在することを、日本人は認識させられたのである。そしてこの構図のなかではうらなりの婚約者であったマドンナは〈中国〉に相当する存在となるが、漱石の作品世界において、女性は多くの場合帝国主義的な欲望の対象を暗喩する形であられる。紙数の都合でそれについてここで詳述することはできないが、『それから』においても『ころ』においても、女性は決して主体的な意志によつて動く存在ではなく、二人の男性の欲望の対象として措

定され、その間で獲得が争われる〈領土〉にほかならなかった。

その際想起されるのは、漱石が明治三八、九年頃の「断片」に書き付けた、空間の占有をめぐる、よく知られた一節である。

二個の者が same space を occupy スル訳には行かぬ。甲が乙を追ひ払ふか、乙が甲をはき除けるか二法あるのみぢや。甲でも乙でも構はぬ強い方が勝のぢや。理も非も入らぬ。えらい方が勝つぢや。上品も下品も入らぬ凶々敷方ずうずうしいが勝つぢや。賢も不肖も入らぬ。人を馬鹿にする方が勝つぢや。礼も無礼も入らぬ。鉄面皮なのが勝つぢや。

人情もない冷酷もない動かぬのが勝つぢや。(中略) 礼儀作法、人倫五常を重んずるものは必ず負ける。勝つと勝たぬとは善悪、邪正、当否の問題ではない——power である——三三である。

ここに示されている〈強・弱〉を対立させる発想が、『坊っちゃん』におけるマドンナをめぐる抗争に投げかけられている。有光隆司もこの「断片」の一節と『坊っちゃん』の連関に着目して、「遠山令嬢〔マドンナ〕と『same space』の「occupy」をめぐる教頭と古賀〔うらなり〕とのささらにはそれを火種として発展した教頭と堀田〔山嵐〕との、相和することなき確執劇」(□内は引用者)がこの作品の「メインテーマ」であると述べている¹⁰。これは疑えない側面だが、重要なのは有光も「遠山令嬢という「same space」の「occupy」といういい方をしてるように、作品の構図において〈女性〉が〈領土〉の比喩として表象されているということである。この着想が、西洋——日本の力関係のなかで描かれたものであることは疑いなく。「space」を「occupy」することによって実現される強さという

観念自体が、明らかに帝国主義的な着想であり、三国干渉では日本はまさに遼東半島という「space」を「occupy」することができず、西洋列強という「強い方」に「追ひ払」われてしまったのである。この一節で想定されている「強い方」が〈西洋〉を含蓄していることは、講演『現代日本の開化』に近似した表現があることから推測される。ここで漱石は、日本人が開化の過程で西洋とつき合っていくために、日本的な流儀を捨てざるをえなくなる事情について、「しかうして強いものと交際すれば、どうしても己を棄てて先方の習慣に従はなければならなくなる。我々があの人は肉刺フオリクの持ちやうも知らないとか、小刀ナイフの持ちやうも心得ないとか何とかいって、他を批評して得意なのは、つまりは何でもない、ただ西洋人が我々より強いからである」(傍点引用者)と語っている。こうした強弱の力関係によって現実世界の流れが冷酷に律されており、しかもそのなかでつねに「強い方」が勝つて終わるという認識が、〈弱者〉であるうらなりがマドンナという「space」を「occupy」することができず、学士で教頭という〈強者〉である赤シャツに「追ひ払」われてしまう展開に形象化されている。またそこに二十世紀初頭の帝国主義的な〈越境〉の時代を生きる人間としての漱石の感覚が露呈していることを我々は否定しえないのである。

そして坊っちゃんはそのルサンチマンを晴らすべく山嵐と共闘することになる。「会津つば」として語られている山嵐が、〈薩長〉とくに〈長州〉を「親」とする坊っちゃんと手を結ぶというのは、一見矛盾しているようにも映るが、ここにこそ、漱石の未来志向的な眼差しが込められている。忘れてはならないのは、この作品の展開において、坊っちゃんと山嵐がつねに親しい関係にあるのではないことである。赤シャツと野だいこの噂話を真に受けて、「宿直事件」が山嵐の煽動によるものと思ひ込んだ坊っちゃん

は、それ以降しばらく山嵐と口もきかない対立的な関係に陥っている。赤シャツへのルサンチマンが再び彼らを結びつける契機となるが、そこに現在から未来へと日本が向かうことに対する漱石の積極的なヴィジョンが託されているといえよう。中盤に語られる坊つちやんと山嵐の対立は、やはり〈長州〉と〈会津〉のそれに照応するものであり、赤シャツを標的とするこ
 とによつてそれが止揚されていく終盤の展開は、そうした国内の党派的な相克を乗り越えて力を合わせることで、〈西洋〉と拮抗するというヴィジョンを示唆しているからである。もちろんそうしたヴィジョンがそのまま実現されると漱石が素朴に考えていたのではない。『坊つちやん』の結末において、坊つちやんは結局赤シャツに対する私的な腹いせをしたにとどまり、彼に対する終局的な勝利を取めたわけではない。そして坊つちやんが東京に帰還していくことによつて、赤シャツの〈力〉は一向に震撼されることなく終わる。その意味でこの物語の最後に浮び上がってくるのは、東洋の小国が西洋を凌駕するという〈越境〉の可能性に対する、漱石の苦い認識にほかならなかった。

〔註〕

- 1 松澤和宏『生成論の探求——テキスト 草稿 エクリチュール』(名古屋大学出版会、二〇〇三・六)。ここで松澤は先生の「遺書」の公開が著作権と「奥さん」のプライバシーの侵害に当たる可能性があるという前提から、「先生の自殺後三十年を経た時点での公表を「私」がひとまず想定して書いているという仮説も成り立つし、また三十年後の五十代半ばに達した「私」が往時を回想しながら手記を綴っているという想定も不可能ではない」と

いう推測をおこなっている。また蓮實重彦は「漱石研究」6(一九九六・五)の『こころ』特集における小森陽一、石原千秋との鼎談で、「僕の感じで言うと、あれは、もう大正も終わりかかった頃に書かれたような気がしてならないんです」という印象を語っている。松澤の趣旨は小論とは異なり、蓮實はこの印象を論考としては提示していないが、両者の直感的な視点はまったく妥当であり、今後こうした地点からこの作品を論じていく必要があると思われる。

- 2 小森陽一「『こころ』を生成する心臓」(『文体としての物語』筑摩書房、一九八八・四、所収)『心』における反転する手記(『構造としての語り』新曜社、一九八八・四、所収)。秦恒平『こころ』(『湖の本』2、一九八六・)。漱石はW・ジェームズの『心理学原理』や『多元的宇宙』を熱心に読み、人間の同一性と意識の連続性に対する認識を得ていた。また『多元的宇宙』における言及から、間接的にベルクソンの哲学を知り、後に英訳によつてベルクソン自身の言説に触れている。しかし『夏目漱石——ウィリアム・ジェームズ受容の周辺』(有精堂、一九八九・二)で小倉脩三も指摘するように、漱石の意識観は彼らの感化によつてもたらされながらも独自の性格を持っている。
- 4 但しここでの野々宮の位置は両義的である。つまり彼は「光線」という〈西洋〉とつながる〈白い〉世界に携わっているとともに、彼の研究室は「穴蔵」にあり、その点では〈暗い〉あるいは〈黒い〉世界の住人にほかならない。また「光線の圧力」が西洋世界が日本に及ぼす西洋の圧迫の暗喩であることはいうまでもない。現に中盤で語られる、三四郎が出席する学生の集会では、「光線の圧力」も「西洋の圧迫」も、同時にではないがいずれも話題にされている。
- 5 平岡敏夫「坊つちやん」試論——小日向の養源寺(『文学』一九七二・二)↓『坊つちやん』の世界』塙書房、一九九二・一)。

6 小森陽一「矛盾としての『坊っちゃん』」(『漱石研究』12、一九九九・二〇〇〇)。

7 四国連合艦隊による下関砲撃事件、及び薩英戦争については、古川薫の『幕末長州藩の攘夷戦争』の他、石井孝『増訂明治維新の国際的環境』(吉川弘文館、一九六六・二) 井上勝生『開国と幕末変革』(日本の歴史18、講談社、二〇〇二・五)などを参照した。『幕末長州藩の攘夷戦争』によれば、フランス艦との交戦に出陣しようとする藩兵たちの出で立ちは「和銃が少々、持っているのは弓矢、槍、刀剣がほとんど」という「戦国時代の装備とまったくかわらないもの」であり、まさに「無鉄砲」な状態であった。

8 坊っちゃんの〈裏〉としてのうらなりの存在は、その命名のあり方にも暗示されている。つまり赤シャツ、山嵐、野だいことといった坊っちゃんの命名はほとんど視覚的な印象によっており、その線でいけば古賀は〈青びょうたん〉とも呼ばれるべきだったかもしれないが、かつての級友の父親がやはり蒼くふくれた顔をしており、その理由として清が「うらなりの唐茄子ばかり食べるから」といったことを思い出して、このあだ名がつけてられている。しかし坊っちゃんは「うらなりとは何の事か今以て知らない」のであり、イメージ性は希薄である。しかもうらなりが清という、自身の起源的な存在と結びつく文脈を持っていることも、彼の坊っちゃんへの分身性を補強している。

9 とくに『こころ』では〈空間〉をめぐる争闘と〈女性〉をめぐる争闘が、重ね合わされて表象されている。『生成論の探求』(前出)で松澤和宏も述べるように、この作品は〈住む場所〉をめぐって二人の青年が争う物語だからである。

10 有光隆司『坊っちゃん』の構造 悲劇の方法について(『国語と国文学』一九八二・八)。